**1.序論**

形態論は一つの言語学一分野。形態論は語の係りで妙とするのである。文法論の一部門。形態素後を対象とし、主としてそれらの形態化を研究する部門。具体的には品詞論が中心的内容になる。( 野村, 1992:56)

形態素は最小の文法単位である。最小の文法の単位として、意味がなくなるので、形態素はそのより分開できっていのである。すべての言語の形態素はいくつかの意味によって区分している。( 辻村 ,1991:141) によると日本語の形態素は二つの区分している。

1. 自由形態素というのは独立で意味を持つ形態素である。
2. 拘束形態素というのは不自由で独立の形態素につかなければならない形態素である。

日本語の接辞件加の過程は拘束形態素を自由形態素に加える過程である。接辞が二つある。形態素前件けに加える接頭辞と形態素の後ろに件け加える接頭辞と形態素の後るに件け加える接尾辞。この接辞件加により派生語とよび屈折が生じるのである。屈折というのは意味呼び品詞を変えおずにある語に接辞を件加することである。

、一般に派生とは単－語を問わすそれに文法的意味持つ非自立単位としての接辞を添加することによって新しい語をつくることをいう。(中田, 1975:67)

派生語、接辞と語基（語）が結合してできている語。複合語とともに、合成語の一種である。複合語が構成要素のそれそれの意味の異なる意味を持

つことが少ないのに対し、派生語は語基の意味に大きな変化が生じることが多い。（野村、1992:170）

**2.本論**

1.**形容詞 + 接尾辞さ**

(2) この井戸の深さは何メートルですか。

形容詞　　名詞

深　+　さ　→　深さ

(2) の‘深い’の基礎語は形容詞ある。その語は派生の過程によって品詞が変わって、イ形容詞　から名詞になるのである。派生の過程をにおいて機能形態素の‘深い’の‘い’消えてその

接尾辞「さ」を件け加えることにより、「深さ」になるのである。その派生により、名詞も意味も終わるのである。

2. **形容詞　+ 接尾辞み**

(1) 今度のﾊﾟｰﾃｨを楽しみしています。

形容詞　　名詞

楽し　+　み　→　楽しみ

(1) の‘楽しい’の基礎語は形容詞である。その語は派生の過程品詞が変わり、イ形容詞　から名詞になるのである。派生の過程においえて機能形態素の‘楽しい’の‘い’が消えてそのに接尾辞の「み」を件け加えることにより、「楽しみ」になるのである。その派生により、名詞も意味も終わるのである。

3. **形容詞　+ 接尾辞がる**

(17) 彼はその音をうるさがったです。

形容詞　　動詞

うるさ　　+　　がる　　→　うるさがる

(17) の‘楽しい’の基礎語は形容詞である。その語は派生の過程品詞が変わり、イ形容詞から動詞になるのである。派生の過程において機能形態素の‘うるさい’の‘い’消えてそのに「がる」を件けかえることによって「うるさがる」になるのである。その派生によって、動詞も意味も終わるのである。

4. **形容詞　+ 接尾辞っぽい**

(12) その女の人は確か黒っぽいセーターを着ていたと思います。

形容詞　　名詞

黒　　+　　っぽい　→　　黒っぽい

（12）の‘黒っぽい’の基礎語は形容詞である。その語は派生の過程で品詞が変わり、イ形容詞から名詞になるなるのである。派生の過程において機能形態素の‘黒い’の‘い’消えてそのに「っぽい」をを件けかえることによって「まっぽい」になるのである。その派生によって、名詞も意味も終わるのである。

5.**接頭辞　ま　+ 形容詞**

(15) まっ赤な火のたまが、空をつつむようにひがりました。

接頭辞　+　　形容詞　　名詞

ま　　赤　　→　　まっ赤

（15）の‘まっか’の基礎語は形容詞である。その語は派生の過程で品詞が変わり、イ形容詞から名詞になるなるのである。派生の過程において機能形態素の‘赤い’の‘い’消えてそのに「ま」をを件けかえることによって「まっぽい」になるのである。その派生によって、名詞も意味も終わるのである。

6. **形容動詞 +接尾辞さ**

(13) 日本人の仕事の<u>勤勉さ</u>は、音速にまさっている。

形容動詞　　名詞

勤勉　　+　さ　　→　勤勉さ

（13）の‘勤勉’の基礎語は形容動詞である。その語は派生の過程で品詞が変わり、形容動詞から名詞になるなるのである。派生の過程に消えてそのに「さ」をを件けかえることによって「勤勉さ」になるのである。その派生によって、名詞も意味も終わるのである。

**3.結論**

| Morfem Dasar | せっとうじ | せつびじ |
|---|---|---|
| イ けいようし | まー | —さ<br>—み<br>— がる<br>—っぽい |
| けいようどうし | X | — さ |

# DAFTAR ISI

KATA PENGANTAR …….i

DAFTAR ISI…….....iii

DAFTAR SINGKATAN……..v

**BAB I PENDAHULUAN**

1.1 Latar Belakang Masalah……1

1.2 Rumusan Masalah ……..6

1.3 Tujuan Penelitian……6

1.4 Metode Penelitian……7

1.5 Organisasi Penulisan……8

**BAB II LANDASAN TEORI**

2.1 Morfologi……10

2.2 Morfem…….....11

2.3 Kata……15

2.4 Derivasi Morfem……16

**BAB III ANALISIS DERIVASI MORFEM ADJEKTIVA BAHASA JEPANG**

3.1 *Keiyoushi* + *setsubiji*

3.1.1 *Keiyoushi* + *sa*……..….20

3.1.2 *Keiyoushi* + *mi*……..……29

3.1.3 *Keiyoushi* + *garu*……..…….35

3.1.4 *Keiyoushi* + *ppoi*……...41

3.2 *settouji* + *keiyoushi*

3.2.1 *ma* + *keiyoushi*……..42

3.3 *Keiyoudoushi* + *Setsubiji*

3.3.1 *Keiyoudoushi* + *sa*…….45

**BAB IV KESIMPULAN**…….49

**SINOPSIS**

**DAFTAR PUSTAKA**

**LAMPIRAN I : DATA**

**LAMPIRAN II : KLASIFIKASI DATA**

**RIWAYAT HIDUP PENULIS**